

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 ★幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 ☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット News Letter

第61号 2010年1月29日(金)

発行：歴史資料ネットワーク



▲ ケルン市歴史文書館の崩壊現場。
 (2009年10月22日撮影。ヘルムート・ヘードル氏提供)



▲ 「ケルン市歴史文書館研究会」にて。
 右から平松英人氏、猪刈由紀氏、
 ヘルムート・ヘードル氏、奥村弘氏。

CONTENTS

● 巻頭言

阪神・淡路大震災から15年

—資料保全活動の発展的継承に向けて— 吉川 圭太 (2)

● 特集「ケルン市歴史文書館」の倒壊と救済活動

「ケルン市歴史文書館研究会」の倒壊と救済活動 松下 正和 (3)

「ケルン市歴史文書館研究会」参加記 石井 大輔 (5)

● 【緊急】大阪府公文書館の移転問題について 松岡 弘之 (6)

● 第11回「火垂るの墓を歩く会」に参加して 森脇 崇文 (6)

● 【続報】台風9号被災歴史資料救出・保全活動 吉原 大志 (7)

● 書評『水損史料を救う』 人見佐知子 (9)

● 「第5回 地域史卒論報告会」のお知らせ (10)

● 「兵庫津歴史講演会」のお知らせ (11)

● 2009年台風9号被災史料救出活動支援募金ご協力の御礼 (12)

阪神・淡路大震災から15年

—資料保全活動の発展的継承に向けて—

吉川 圭太

阪神・淡路大震災から15年が経ちました。すでに神戸市内に住む3人に1人は震災後に生まれるか、または他の地域から移り住んできた人だそうです。

私もその一人で、昨年4月に仙台から神戸に来ました。震災当時はまだ中学生で、テレビや新聞を通して遠く離れた被災地の様子を知るのみでした。現在、私は人と防災未来センター資料室で働いていますが、そこでまず気づかされたのは、15年前に見た衝撃的な映像の大半が空から撮られたものに対し、実際に市民が残した記録は震災のなかを生きてきたそれぞれの人たちの目線になっていることでした。何気ないことですが、大きな発見でした。そして資料の提供者と接するなかで、私も、それぞれの体験や想いの「受け手」であるとともに「伝え手」でもあるということ、自覚するようになってきたと思います。

神戸に来る大きなきっかけは、仙台で携わっていた宮城資料ネットです。宮城県北部連続地震が発生した2003年7月、修士課程1年だった私は、先輩からの誘いをきっかけに資料レスキューへ参加し、その後の院生時代を宮城資料ネットとともに過ごしたと言えます。2008年6月には岩手・宮城内陸地震が発生、宮城資料ネットは二度の大きな地震災害を経験し、今でも継続的な活動が展開されています。

史料ネットのモットーが「走りながら考える」であるように、宮城の場合も課題に直面するたびに、何をなすべきか、何ができるかを考え動いてきました。神戸と宮城では経験した災害の規模や種類、地域の成り立ちや歴史的経緯、活動の主力となる院生が置かれている学会状況等で異なる面があります。そうしたなかで走りながら考えてきたからこそ、両ネットの活動スタイルや保全処置の方法論などには互いに独自の点があるように思います。ただ、資料を守り、現場からものを考え、地域社会とともに歩むという、その活動の根本—「原点」は一緒ではないでしょうか。

この間、各地で史(資)料ネットが立ち上げられ、今も活動が継続されています。そうした資料保全活動の新しい動きを切りひらいていった歴史資料ネットワークもこの2月で15年目を迎えることとなります。昨年5月、寺田匡宏さんから初期史料ネットの関連資料が、人と防災未来センターに寄贈されました。近々ウェブ上で目録が公開される予定ですが、その資料からは、ボランティアとしての活動のあり方、市民社会における歴史学のあり方や課題について議論を重ね、模索しながら前に進んでいった様子がうかがい知れます。

震災から15年。震災を歴史的に検証していく時期になっていることは確かです。一方、昨年8月の台風9号による水害をはじめ、各地で自然災害はなお相次いでいます。史料ネットの中心的な担い手も世代交代し、私も含め阪神・淡路大震災を体験しなかった者が多くなりました。こうした今、阪神・淡路大震災以降切りひらかれてきた資料保全活動の「原点」を共有しながら発展的に継承していくこと、そして各地の史(資)料ネットのさらなるネットワーク化が重要ではないかと考えています。

(よしかわ・けいた／歴史資料ネットワーク運営委員)

「ケルン市歴史文書館」の倒壊と救済活動

—ケルン市歴史文書館研究会の開催—

松下 正和

ケルン市歴史文書館研究会 概要

日 時:2009年11月13日(金)17時30分~20時
場 所:神戸大学文学部B棟152教室(視聴覚教室)
主 催:地域歴史資料学研究会(科学研究費・基盤研究(S)「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」研究代表者=奥村弘の研究グループ)
報 告:ヘルムート・ヘードル氏(グラーツ大学)
「ケルン市歴史文書館の被害と復興の現状について」
平松英人氏(ハレ大学)「ケルン市歴史文書館倒壊と市民アーカイブ構想」
コメント:猪刈由紀氏(上智大学)
司 会:奥村弘氏(神戸大学)

ケルン市歴史文書館研究会 開催の経緯

ドイツ国内のみならずヨーロッパでも屈指の規模と歴史を誇るケルン市歴史文書館の建物が、2009年3月3日に突如として倒壊しました。この倒壊によって、史料館職員や利用者に犠牲者がでなかったのは不幸中の幸いでしたが、多くの貴重な史料が瓦礫の中に埋もれてしまい、中には地下水層まで入り込み大量の史料が水損しました。現在も回収・復旧作業が継続中とのことで、ドイツ・日本双方で支援活動が続けられています。



▲ 倒壊したケルン市歴史文書館

3月18日、史料ネットには、大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館から、ケルン市歴史文書館の被害について連絡があり、被災史料救済・処置方法についての問い合わせがありました(神戸市の防災担当の方から紹介してもらったとのことです)。その際に、1995年の阪神・淡路大震災以降の史料保全活動や、2004年台風23号の際の水損史料処置についてお答えいたしました。また、文化庁の防災担当、文化財保存修復学会・全史料協・TRCC、坂本勇さん・尾立和則さん・青木睦さんなど被災史料保全活動をなさっている方々をご紹介いたしました。7月2日には、史料ネットブログで「ケルン市歴史文書館救援の会からの募金依頼のお知らせ」をアップしました。

そこで、海外事例も含めて被災史料の保全に関する研究を行っている奥村弘氏の研究グループ「地域歴史資料学会」(科学研究費・基盤研究(S)「大規模自然災害時の史料保全論を基礎とした地域歴史資料学の構築」研究代表者＝奥村弘)の主催で、同館の支援活動に関わっておられるお三方をお招きし、上記のような要領で研究会を開催いたしました。

本研究会では、ヘルムート・ヘードルさん(グラーツ大学)に、被害状況や救出状況についての最新現地レポートをしていただきました。また、2009年10月号の『歴史評論』の時評「ケルン市歴史文書館の倒壊とその後」の執筆者の一人でいらっしゃる平松英人さん(ハレ大学)に、市民の協力を得ながらの復興過程と、そこから新たに見えてきた「市民アーカイブ構想」についてご報告いただきました。また日本からの支援活動について情報を発信されている猪刈由紀さん(上智大学)からもコメントを頂戴しました。

当日は、ドイツと日本の双方の、史料館と市民をめぐる関係についても議論ができました。神戸大学大学院文化科学研究科の石井大輔さんにも当日の感想を寄せていただきましたのでご覧ください。

現在も救済活動は継続中です。文書館倒壊から現在について、「ケルン市立歴史文書館救援のためのサイト」(原題 "Japanese Solidarity for the Cologne Historical Archive")

(<http://groups.google.co.jp/group/japanese-solidarity-for-cologne-historical-archive>)から、管理人の猪刈由紀氏の許可を得て、少しご紹介します。

1. 被害状況

自治体の文書館としてはアルプス以北最大のものであるこの歴史文書館は、その規模は書架にして延べ26kmの長さにおよぶ分量の文書、最古のものは922年という証文書65,000点、地図や図面104,000点、遺品や遺稿780点を数えました。そこにはケルン史に関する史資料はもちろんのこと、アルベルトゥス・マグヌスの手稿やノーベル賞受賞者ハインリヒ・ベルの遺稿など、さらにその枠を超える重要な文化遺産もが含まれます。建物はゼヴェリーン通りに面した高層部分(地上7階、地下1階)とその奥の、閲覧室や研究室があった平屋建て部分からなり、平屋部分に保管されていた約500,000点の写真・フィルム資料は4,000点の証文書とともに無事でした。この無事だった証文書がケルン大司教区歴史文書館に移送される様子は、WDR Fernsehenで放映されました("Lokalzeit", 2009年3月12日)。

2. 掘り出す作業の進展と再建計画

すでに5月中に、全体の80%に相当する、回収可能な史資料が掘り出されたということで、6月3日現在、残りの20%にあたる未回収の史資料が、地下水位下の深さに埋もれているとのこと。この未回収分を今後どう扱うのか、議論を呼んでいます。

再建場所について、いわゆるゲーリング地区(聖ゲレオン教会周辺)、メッセ(ライン川対岸地域)、あるいは元のゼヴェリーン通りに再建する案が出ていましたが、先日(2009年9月17日)、Köln Süd 地区のEifelwallに再建すると市議会で決定したようです。

3. 寄付のお願い

「ケルン市歴史文書館 救援の会」(代表 猪刈由紀 いかりゆき)では、今後の復興を長期的に支援するために、寄付を募っています。詳細はホームページをご覧ください。

「ケルン市歴史文書館研究会」参加記

石井 大輔

「ケルン市歴史文書館研究会」は、2009年11月13日神戸大学にて開催された。この研究会では、グラーツ大学のヘルムート・ヘードル氏より、現地調査や復旧作業にあたっている方々へのインタビューに基づく現状について、そしてハレ大学の平松英人氏より、文書館倒壊後の復旧作業から「市民アーカイブ構想」に至る過程についての報告が行われた。さらに、上智大学の猪刈由紀氏に日本側からの支援活動についてのコメントがなされた。



ヘードル氏による「ケルン市歴史文書館：倒壊・被害・救出・現状」と題した報告では、ヘードル氏が撮影した文書館倒壊後の写真を用いての事故の推移に関する説明が行われた。2009年3月3日の14時頃発生したケルン市歴史文書館の崩壊は、隣接するゼヴェリン通りの地下で進められていた地下鉄工事が原因であった。この地下鉄の壁が破損したことによって、文書館の地下倉庫が崩れ、さらに文書館全体が隣接する二つの建物を巻き込みながら崩壊した。この事故により、文書館の職員とその来館者には被害がなかったが、隣の建物にいた二人が不幸にも亡くなったそうである。この事故では多くの史料が瓦礫の中に埋もれてしまったが、市民ボランティアを含めた様々な人々の努力によって、現在85%ほどの史資料が「救出」されている。この「救出活動」には、延べ2,000人がかわかり、現在も続いているとのことであった。

次に、ケルン市の歴史を研究し、実際にケルン市歴史文書館に訪れていた平松氏からは、「ケルン市歴史文書館倒壊と市民アーカイブ構想」と題しての報告を受けた。文書館倒壊により被害を受けた史資料のすべてを救出・修復することは時間もかかり、現実には困難なことであることから、インターネット上に「デジタルケルン歴史文書館」が立ち上げられた。これはかつて文書館を訪れ利用した者の手元に残された史資料の複写を集め、修復困難となった史資料を含めた文書館をデジタル上で再構築しようとするプロジェクトである。このプロジェクトを立ち上げ、推進しているのは、ケルン市などの公的機関ではなく、研究者などの「市民」であるという。

最後に、猪刈氏が日本側から支援を行うこととなった経緯やその活動について話をされた。猪刈氏や平松氏などのケルン市歴史文書館を利用した経験のある日本人研究者たちを中心に、救援の輪が日本でも広がっていることが紹介された。

文書館倒壊という災害に際して、ケルン市などの公的機関の消極的な態度が際立っている。また、文書館を利用しない一般の市民の間にも無関心な雰囲気があるという。こうした現状を見ると、我々、文書館を利用する研究者がこうした施設や歴史的資産の重要性を発信していくことが必要だと強く感じた。

(いしい・だいすけ／神戸大学大学院文化科学研究科博士課程院生)

【緊急】

大阪府公文書館の移転問題について

松岡 弘之

昨今、各地の地方自治体で財政難を理由として行政分担領域の縮小が続いているが、長期的な観点から説明責任を果たすため重要な記録資料を収集・公開するという公文書館機能もその例外ではない。昨年12月、大阪府は現在地（大阪市住吉区）を売却して単独館を廃止し、現用文書の公開を担っている府政情報センターと統合のうえWTCに移転するという構想を表明した。その準備として館内専門職の意見を聴取しないまま一部文献等を府立図書館に移管・廃棄するという。また、年末には公文書館の書庫を大阪府立国際児童文学館跡に設けるとも報じられた。

こうした府の方針は、全体像がなお不明なものの、昨年公布された公文書管理法の趣旨に逆行し、公文書館機能の解体に繋がる危険性がある。そのため現在有志が「大阪の公文書館問題を考える」というサイトを立ち上げ、関係する動向についての情報収集・発信を開始している。関連団体から出された要望書等にあるように、公文書館は何も専門家のためではなく、市民のための組織である。年金記録問題に象徴されるように、適切な公文書管理を怠れば市民の生活や権利は脅かされ、知事のいう地方分権も画餅に帰することとなる。

今後の動向に注目していただきたい。

□サイトアドレス=http://wiki.livedoor.jp/archives_osk/

□メールアドレス=archives_osk@livedoor.com

□ツイッター・アカウント（更新情報等配信）=[archives_osk](#)

（まつおか・ひろゆき／大阪歴史科学協議会研究委員）



第11回「火垂るの墓を歩く会」に参加して

森脇 崇文

2009年8月8日（土）、歴史資料ネットワークが例年協力し、今年で第11回を迎える「火垂るの墓を歩く会」（御影コース）が開催された。本稿は、今回初めてこの「歩く会」に同行させていただいた私の参加記である。

集合時間の朝10時前、阪神電車御影駅の改札を出ると、そこにはすでにちょっとした人だかりができていた。参加者は年々増えているとは聞いていたものの、想像を遙かに上回る人数に驚かされる。後で実行委員会の方に聞いたところによると、この日の参加者は約70人。同月4日（火）に開催されていた西宮コースの参加者もほぼ同人数で、二日間の延べ人数は約140人にもものぼるという。「火垂



▲ 石屋川公園にて説明をうける。



▲ きつい日差しにもかかわらず
大勢の参加者が。

野原の中ばつんと佇んでいたからだろうか、あるいは清太の視線に同化していたからだろうか、ずっと大きく見えたのだが。

その後、原作「火垂るの墓」の著者である野坂昭如氏が住んでいたという地区を散策した。新しい住宅が建ち並び、当時を偲ぶようなものは何も残されていない。逆をいえば、古いものが何一つ残されていない町並みこそが、あの焼け野原が現実の光景であったことを物語っているのだろう。

パンフレットの表紙には、節子を背負った清太が石屋川沿いの道に立って、御影公会堂の方を呆然と見つめるシーンが載せられている。どれくらい多くの人が、彼と同じようにこの公会堂を眺めたのだろうか。空襲に遭う前の御影では、この公会堂はどんな風景の中にあっただろうか。そんな事を止めどもなく考えたりした。

今回歩いた御影の街は、64年前の光景など想像もできないほど活気溢れるものだった。当時から受け継がれているものは、御影公会堂と石屋川の風景、そして成徳小学校に残されたわずかな品物くらい。しかし、これらが存在している内は、ぜひともこの「歩く会」は続けていって欲しい。「火垂るの墓」の情景を、今の御影の風景と重ねられるように。そして、戦争が人間の心と生活をいかに荒廃させたのかを記憶させ続けるために。

(もりわき・たかふみ／歴史資料ネットワーク副事務局長)

るの墓」という作品が訴えかけるものが、今なお新たな参加者を呼び続けているということだろう。

当日の天気はまさに快晴といったところで、歩き始めると汗がにじみ出てくる。周りの参加者の大半は帽子をかぶり、対策万全の体であったのに対して、私は無謀にも無帽。自分の準備の悪さを呪いながら歩くことになった。

しばらく歩くと、石屋川沿いの小道につき当たる。少し向こうに見覚えのある建物がみえた。「火垂るの墓」作中に登場した御影公会堂だ。初めて目にした実物は、想像していたよりも小さく思えた。作中に出てきたときは、焼け



▲ 御影公会堂前にて。

【続報】

台風9号被災歴史資料救出・保全活動

吉原 大志

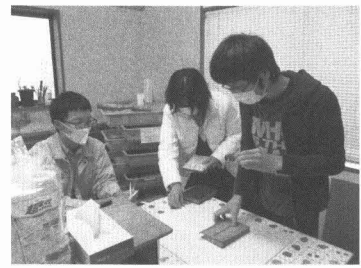
2009年8月に発生した台風9号による水害に対して、歴史資料ネットワークは、兵庫県佐用町・宍粟市において被災歴史資料の救出・保全活動を行ってきた。当初は史料の被災状況確認や、救出が活動の主たる部分であったが、10月ごろからは、被災が確認され救出された史料の修復へと活動の重点が移ってきている。この間の動向については、すでにこれまでのニュースレター

(第 59 号・60 号)において報告がなされてきたが、今回はそれ以後に佐用町で行なった活動の概要について報告したい。

11月21日 第11回 水損史料保全活動

佐用町文化財調査室にて修復作業を行ない、史料ネットから 3 名が参加し、佐用町教育委員会の藤木透氏にもご協力いただいた。

この日に補修作業を行なったのは、史料ネットにレスキューを依頼して下さったG家の所蔵史料で、そのほとんどが近世後期から近代初頭にかけての年貢免状や皆済目録であり、前後が欠けている断簡も多くあった。これらの史料の穴埋めを進め、同時に断簡どうしを接続する作業を行ない、3 点の断簡を接続



▲ 仮目録作成作業のようす。

することができた。穴埋めは、史料の欠損部分に、裏側から糊を使用しながら補修用の和紙を埋め込む方法をとった。



▲ 文書穴埋め作業のようす。

またL家から依頼を受けた写真のデジカメ撮影を行なった。これによりL家所蔵写真の撮影作業はすべて完了し、これまで撮影したものとあわせ、計 15 冊すべての写真の複製を作ることができた。内容は家族写真が多く、おそらくは 1960～70 年代ごろのものと思われる。しかし半分以上は写真表面の乳剤が溶けて原形をとどめておらず、完全な修復ができなかったのは残念であった。

12月20～21日 第12回 水損史料保全活動

佐用町文化財調査室にて修復作業を行ない、史料ネットから 7 名が参加し、佐用町教育委員会の藤木透氏や、臨時職員の方々にもご協力いただいた。

前回に引き続き、G家所蔵史料のうち断簡の接続作業を行ない、新たに 2 点の接続が完了した。

また 10 月 4 日に解体中の蔵から搬出したB家所蔵史料の撮影と、仮目録の作成を行なった。計 194 点の近代史料であった。内容の詳細な把握は今後進めていかなければならないが、戦前の農業雑誌や、社会事業関係の冊子のほか、戦後の小学校関係のチラシなどもあった。こうした多様な史料の存在は、家の歴史だけでなく、佐用町の地域のあり方を理解することにも役立つものであろう。



▲ 剥がし中の下張文書。糊付けが強かった。

これらの近代史料と同じときに搬出した水損屏風の下張り剥がしも行なった。糊付けが強かったために剥がすのが困難で、糊付け部分に絵筆などでエタノールを浸み込ませながら剥がしていったものの、剥がすことができたのは 3 層分にとどまり、1 曲分を剥がすことはできなかった。

さらに前回撮影したL家所蔵写真をDVDに焼き付け、複製作業はすべて完了した。

今後は、史料修復の継続とともに、お預かりした史料を所蔵者へ返却するための準備作業を進める予定である。

(よしはら・だいし／歴史資料ネットワーク事務局員)

書評

松下正和・河野未央編

『水損史料を救う 風水害からの歴史資料
保全』岩田書院ブックレット アーカイブス系⑫

人見 佐知子

歴史資料ネットワーク(以下「史料ネット」)は、阪神・淡路大震災後の被災歴史資料の救出・保全を目的として生まれたボランティアを主体とした団体である。震災対応が基本であった史料ネットが、風水害時の被災史資料の救済に着手したのは2004年10月の台風23号がきっかけである。

本書は、2004年以降の風水害による被災歴史資料の救出・保全・修復活動の経緯(第1部第1章、第2章)とその後の展開(同第3章)、および活動に携わった当事者たちが「風水害時の被災歴史資料救出活動」について検証した、シンポジウムの記録をまとめたものである(第2部)。歴史研究者を中心に、風水害で被災した紙媒体を中心とする資史料(以下「水損史料」)の救出・保全・補修活動を大々的に実施したのは、おそらく史料ネットが初めてである(もちろん、保存科学の分野では水損史料の保全についての研究と実践例が積み重ねられている)。そのため、2004年の台風23号、2005年9月の台風14号への対応が一段落すると、水損史料の修復方法についての講習会「水損史料修復ワークショップ」が各地で開催されることとなった(第1部第3章)。

ただし、本書を水損史料の修復の「マニュアル」として期待した読者は裏切られることになる。本書の最大の目的は、これまで経験のない風水害対応にあたった史料ネットの試行錯誤の経験と、そこから得られた課題を読者と共有することにある。そして今後も必ずやってくる地震や大規模水害の際の歴史資料の保全体制を構築するための土台作りにある。本書で示された「マニュアル」(本書末収載「参考資料」)は、今後の個別事例の積み重ねと経験の共有化によって、常に改変されていくはずのものである。

また、被災史資料の保全活動に逼進する中で得た著者たちの共通認識が、逆説的ではあるが、平常時の地域社会との関係づくりが最も肝要であるという点は重要である。被災地(とくに被害が甚大な場合)では、生活復興を優先せざるを得ず、史資料どころではないという状況にあることは推測に難くない。そのような場合、いかにスムーズな対応が出来るか否かは、地域における行政・住民・大学それぞれの歴史資料への関心のあり方と、それぞれの日頃の関係のあり方に大きく左右される。

まず、未指定文化財を含めた古文書の悉皆調査(所在確認、目録整備)を常日頃から行い史資料台帳を作成し、それを定期的に更新していくことである。そうすれば、災害発生時の被災史料パトロール(各戸巡回調査)の迅速な実施が可能となる。その担い手は、地域の歴史資料と接する機会の多い自治体史編纂職員や研究者(大学)、郷土史研究団体などが期待される。そうした機関や団体は、史料所蔵者に対して史資料管理の方法や、被災時の処置方法などについて伝えるとともに、日頃の管理状況について定期的に確認作業を行わねばならない。その根底にあるのは、歴史資料の保存・保全が、歴史研究者のためだけではなく、地域の人々の権利と未来への遺産を守ることであり、地域コミュニティの基盤をなすという意識=「思想」(本書まえがき)である。史料ネットは、こうした地域に密着したかたちでの持続的な活動と、日常的に連携を保つことによってはじめて被災時の被災史資料調査・保全体制を円滑に構築することができるのである。

ところで、本書の第部第4章は、全体のなかで異質な位置にある。というのも、史料ネットはボランティア組織であることを前提とし、史料ネットが主催する水損史料修復ワークショップも、今後も史料ネットがボランティアを母体として活動を展開していくために、水損史料の修復の経験やノウハウを知悉し、災害時に「ボランティア・リーダーとなるべき人材を養成することを目的としている(第1部第3章)。それに対して第4章は、野田正

彰氏の『この社会の歪みについて』(ユビキタ・スタジオ 2005 年)を参照しながら、ボランティアとは、社会に本来必要な人材が足りていないことのアピールであり、本来の仕事とは別にもつ技能を活用していくためのものであると定義し、「史料ネットはボランティア組織でいいのか」と問題を提起している。

しかし、このことは史料ネットがボランティアで運営される組織であることを直ちに問題化するわけではない。現在、人文諸科学の分野において定職としての大学教員や学芸員のポストが減少しており、それにかわって任期制や嘱託のかたちをとる職が拡大していること、歴史資料を守り伝える役割を担ってきた博物館・史資料館などが指定管理者制度の導入や、大幅な運営費削減(場合によっては機能縮小・廃館を強制される場合もある)など様々な困難な状況に直面していること(本書松下論文「水損史料保全活動をめぐる現状と課題」)、こうした状況が改善されないかぎり、史料

ネットは、現在の「ボランティア」(院生やオーバードクターからなる若手研究者)に依存する状況は変わらない。『水損史料を救う』活動は、こうした問題をも社会に鋭く問いかけている。

去る 2009 年 8 月 8 日から 11 日にかけての台風 9 号による豪雨は、兵庫県佐用町、宍粟市、岡山県美作市などに大きな被害をもたらした。史料ネットは、同年 8 月 15 日より被災地入りし、被災歴史資料の救出活動を展開している。その様子は、日々ブログに更新されている。本書とあわせて参照されたい。被災歴史資料の救出・保全活動の最前線を知り、改めて本書を読み直すことで、今後われわれがなすべき課題を見だし共有されんことを願う。

(『専門図書館』.238、2009 年11月より転載)

岩田書院 2009.05 A5 版 156 頁、1680 円

(ひとみ・さちこ／甲南大学人間科学研究所)

◆追記 前々号以来のニュースレターで既に発信されているように、兵庫県佐用町を中心とする 2009 年台風 9 号被災歴史資料救出・保全の実践活動のなかで、本書の内容をさらに発展させるべくさまざまな水損史料救出・保全の方法が編み出されている。本書の続編を期待したい。

第 5 回 地域史卒論報告会のお知らせ

神戸史学会と歴史資料ネットワークは、歴史資料保全活動を進めるためには、研究者と市民との間に、地域史認識・歴史資料をめぐる価値観の共有が必要であると考え、そのための「場」のひとつとして、2006 年より毎年、地域史卒論報告会を開催してまいりました。

今年も、主に兵庫県や大阪府の地域史を題材にした意欲的な卒業論文を報告してもらう予定です。学生たちの努力の成果をめぐる議論に、奮ってご参加ください。

日時 2010 年 3 月 20 日 午後 1 時～午後 5 時ごろ(予定)

場所 神戸市立兵庫勤労市民センター 第 3 会議室(JR 兵庫駅北側すぐ)

報告(予定) 細川絵美氏(大阪市立大学)「近世大坂の相撲渡世集団」

井澤禎明氏(神戸大学)「日露戦後期における農事改良事業の一考察

—淡河川・山田川疏水事業を通して—

中野佳和氏(神戸大学)「旧制中学校の受験競争をめぐる史的考察—大正期の兵庫県を中心に—

参加無料

参加申込方法(お問い合わせ) 歴史資料ネットワークまでメールか FAX でお願いします。

メール : snet@litkobe-uac.jp FAX : 078-803-5565

兵庫津歴史講演会

日時

平成二十二年二月二十七日(土) 午後二時～四時

参加費

無料



兵庫津周辺(「兵庫国名所港津図屏風」堺市博物館蔵より)

暦応元年(1338)、東大寺は室町幕府より兵庫津の北関における商船目銭(しょうせんめせん)と呼ばれる関税の徴収権を獲得します。「兵庫北関入船納帳(ひょうきたせきいりふねのうちょう)」は、文安二年(1445)の一年間の東大寺による商船目銭の徴収を記録した帳簿であり、十五世紀なかばの瀬戸内海の海上輸送の実態を伝える極めて貴重な資料です。この度の講演会では、「兵庫北関入船納帳」から読み解くことができる、当時の瀬戸内海の水運と兵庫津の果たした役割について、お話をうかがいます。

- ◆会場／**兵庫公会堂** (兵庫区役所地階)
神戸市兵庫区荒田町一丁目二十一番一号
神戸電鉄「湊川駅」、神戸市営地下鉄「湊川公園駅」より徒歩約五分
- ◆講演／**中世の瀬戸内海と兵庫津～「兵庫北関入船納帳」が語るもの**
特別講師／神戸大学名誉教授、奈良県立大学前学長 神木 哲男氏
- ◆パネルトーク／**十五世紀の兵庫津～「兵庫北関入船納帳」の背景**
講師／大阪大学大学院文学研究科博士後期課程
歴史資料ネットワーク 中野 賢治氏
- ◆雅楽演奏／**生田雅楽会**
- ◆申し込み／往復はがきに「兵庫津講演会希望」と明記のうえ、参加希望者全員の住所・氏名・電話番号を、返信用に返信先の住所・氏名を記入して、
〒652-8570(住所不要) 兵庫区まちづくり課兵庫津講演会係まで
(二月十七日必着、一枚のはがきで五名まで申し込み可)
- ◆定員／**三百名** (申し込み多数の場合は抽選)

お問い合わせ／**神戸市兵庫区まちづくり課 TEL.078-531-0033**

主催／兵庫区民まちづくり会議、歴史資料ネットワーク、神戸市兵庫区

2009 年台風 9 号被災史料救出活動支援募金ご協力の御礼

支援者一覧(敬称略・順不同・10 月 22 日以降、1 月 20 日現在)

小島道裕、辻川敦、山本憲太郎、長井純市、岩田書院、松岡弘之、井内誠司、藤原立子、鈴木良、武田和也、河村昭一、前田章賀、鈴木哲也、小林基伸、山藤良治、樺井義孝、前田一郎、吉岡孝、神庭真二郎、三鬼清一郎、大橋幸泰、平川新、南尊融、義江明子、渡辺英夫、馬場弘臣、橋本政良、渡辺尚志、大谷正、豊田元彦、八尾嘉男、横山奨、白石健二、堤啓次郎、沼田武彦、渡辺武、村井早苗、堀和生、佐々木隆爾、福田英一、藤木久志、松川之利、吉原勝義、吉原幸子、今井典子、高橋充、中込律子、高田陽介、坂本昇、杉本史子、秋山晶則、浅倉直美、斎藤洋一、尾立和則、鈴木拓也、廣田浩治(歴史館いずみさの)、百瀬正恒、中尾浩康、奥山哲夫、細井浩志、入江正則、久保田宏、松下佐知子、山名暢、西岡芳文、横山甲徳、坂輪宣政、林聡、木部和昭、山田修士、佐々木倫朗、三宅唯美、三宅正子、伊川健二、佐藤信行、田中梓都美

当ネットでは、2009 年台風 9 号発生直後から、兵庫県佐用町を中心とする被災史料救出活動のための緊急支援募金へのご協力をお願いしてまいりましたが、2010 年度 1 月末でひとまず終了させていただくこととなりました。

この間、大変多くの皆様方から活動に当ネットのご理解を賜り、ご寄付いただきましたことにつきまして、この場を借りまして、心より感謝申し上げます。

緊急体制は解きましたが、被災資料救出活動は、今後も継続する予定です。何かとご多用とは存じますが、当ネットの今後の活動へもご理解・ご協力賜りますようよろしくお願い致します。

お寄せいただいた募金についての最終的な事業報告および収支決算については、来年度の当ネット総会(2010 年 6 月実施予定)で行い、ニュースレター等で会員の皆様にお知らせする予定です。

歴史資料ネットワーク

◆お詫びと訂正

前号の支援者一覧のうち、菅良樹様のお名前を、菅良樹(敬称略)と誤記しておりました。謹んでお詫び申し上げますとともに、ここに訂正させていただきます。

史料ネット NEWS LETTER No.61 2010 年 1 月 29 日発行

編集・発行 歴史資料ネットワーク

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 1-1 神戸大学文学部内 史料ネット

TEL&FAX:078-803-5565 (開室時間 平日の午後 1 時～5 時)

e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp

被災史料救出活動のようす・詳細は日々ブログに更新しています。

http://blogs.yahoo.co.jp/siryo_net